

短期海外研修の成果と長期海外研修への展望

名古屋文理大学基礎教育センター教授 松田 康子

MATSUDA Yasuko

1. はじめに

本学短期大学の海外研修は1994(平成6)年度から年1回3月上旬に実施し、2011(平成23)年度で16回目となった。研修場所はオーストラリアのシドニー・ブリスベン、アメリカのロサンゼルスと変わり、プログラムの内容も改良してきた。参加学生は16回の実施で合計413人になる。参加学生の数は年々減少してきたことと、学生たちの参加意識にも変化が見られるようになった。それぞれの学生アンケート調査の結果と報告書の内容を比較し、変化していないと思われる点と変化したと思われる点を報告し、長期の海外研修につながるかどうかを検討したい。

2. 本学の海外研修

本学の海外研修は第1回から第7回まではシドニー、第8回から第12回まではブリスベン、第13回から第15回まではロサンゼルス、16回目はブリスベンの各大学キャンパスで実施してきた。「広く世界の歴史と文化を学び、正しい歴史観を確立する」という本学建学の精神に沿って、異文化体験と語学学習をするという目的で現地の大学における英語研修とホームステイを組み合わせて始まった。本学は英語を専攻する学科がないため、専攻分野に合わせて学生たちがより興味を持てる体験を加えた独自のプログラムを作り上げていった。具体的には学生が目指している栄養士に関連して、現地の栄養士の講演、給食管理者の講演と給食施設内見学、現地のスーパーマーケット比較見学などをプログラムに入れている。現地大学での半日の語学学習の内容も、午後からのフィールドワークに関連するものやホームステイで役立つ英語の学習に絞ることなど、要望を伝えて実施してきた。日程も学生たちがホームシックを感じるほどの日程でない11日間から始め、学生からの要望などから現在は13日間実施している。この研修は短期大学の企画で実施し、大学の学生も参加することができる。そして、研修には本学教員が1人または2人同行している。

3. 海外研修の成果

(1) ホームステイ・異文化体験

オーストラリアにおける研修と、ロサンゼルスでの研修の最も大きな違いは、学生の移動手段であった。オーストラリアでは学生たちは通学や休日に公共交通機関を使って自分たちで行動していたが、ロサンゼルスでは公共交通手段がないため、大学のバスを利用するかホームステイ先が送迎するかであった。学生たちはホストファミリーに依頼しないと移動ができないため、休日の過ごし方もホストファミリーとの重要な話題になっていたようである。しかし、国が違い交通手段が違ってもホームステイでの経験は変わらず学生たちの一番の楽しみであった。ホストファミリーと過ごして

楽しかったことについては、多くの学生は「夕食後の団らん」と答え、「話が絶えなくて常に笑っていた」、「好きな食べ物や歌手の話で盛り上がった」、「観光パンフレットには載っていない素敵な場所に食事に連れて行ってもらった」、「家族でゲームをしたり子どもたちと遊んだ」等をあげている。ホームステイ先で困ったことは、生活面ではなく、「英語のコミュニケーション」と答えている。学生たちは「ホストファミリーは自分たちが英語を理解していないことに気づいて、分かりやすい会話にしてくれた」ことに感謝し、ホストファミリーの気遣いを嬉しく思っていた。「親切で別れるのがつらかった」とも答えている。ホームステイ先は学生を受け入れることに慣れている家庭ばかりであった。

ホームステイで学んだことについては「食生活（知らない野菜が出た）」、「Yes, Noをはっきり言わないと質問されるのであいまいな答えをしない」、「外国人は愛情表現が大きい」、「日本の良さと外国の生活事情」、「人と積極的にしかかわることの大切さ」、「誠意があれば相手に伝わる」、等いろいろな感想が述べられていた。よい感想も悪い感想も異文化の中で体験して感じたことばかりであった。現地では自分が外国人なのでしっかりと異文化を体験するようにと事前研修で指導してきたことを実践できたようである。そして、帰国後の報告書には、どんな観光地を訪れたことよりもホームステイでの家族との触れ合いが一番語られていて、大きな影響を受けたことがうかがえる。

（２）英語研修・英語力

参加者は英語を専門に学んでいる学生ではないので現地大学での英語研修については、身近な実践的な英語や午後の見学研修などに関連した内容を依頼した。Starbucksでコーヒーを注文したり、郵便局で切手を買う実際の練習もさせてもらった。学生たちは練習しながら実践するのを楽しんでいたようである。栄養士の講演の前には午前の授業で栄養士に聞きたいことを英語で用意しておき、実際に英語で質問することもできた。答えは通訳をしてもらった。

この研修全体で学生が自覚している英語力への影響についてのアンケートではほとんどが「とても影響を与えた」、「少しは影響を与えた」と答えており¹⁾、英語に対する気持ちの変化についても「英語への関心が増した」、「聞く力が向上した」、「間違いを恐れなくなった」、「英語への抵抗がなくなった」が多く、海外研修が英語への関心を高めるモチベーションになっていると言える。

（３）人間的成長

この海外研修で得られたものとして、ほとんどの学生が人間的に「とても成長した」、「少しは成長した」と答えている。英語が苦手であっても、日本で生活しているのとは違う環境の中で生活し、自分自身何か成長したと感じられるようである。年度によって参加人数が違うが、積極性・自立性・社交性・探究心・努力・気配りなどが成長したと自覚している。

海外研修全体の感想や「行く前と行った後での気持ちの変化」についても「興味をもったことがいっぱいあってやりたいことが増えた」、「日本だと個性があると目立つけど外国では個性の集まりだ」、「自分で考えて行動していかないといけないと分かった」と新しい発見をしたことがうかがえる。そして「海外旅行がもっと好きになり、

他の国へ行きたくなかった」、「英語を勉強したい」、「今やるべきことなどもっと自分のことは自分で自立し、もっと積極的になろうと思った」など前向きな答えも見られた。

後輩へのアドバイスでは「多くの人と出会うことができ自分の考え方を幅広くするチャンスだと思う」、「2週間はあっという間です。思う存分楽しむためにも積極的な行動や会話コミュニケーションを心掛けることが大切」、そして、多くの学生が単語だけでもいいから英語の勉強をしていくことを勧めている。

人間的成長は自分ですぐに感じるようなものではないかもしれないが、この海外研修に参加することによって心揺さぶられる経験をして、何かを得たことは確かなようで、学生自身が短期間に変わったと答えられる経験ができたと言える。

(4) 専門分野に関連した研修とその他

本学の専門分野である栄養士教育に関連した研修として、それぞれの国の栄養士の講演をプログラムに入れている。学生たちは外国の栄養士の活動について学ぶことができ、興味をもったようである。外国での栄養・食事情を目にしたことは学生のこれからの栄養教育に大きな意義を持つものと思われる。大学の給食設備の見学は、日本でもあまり経験していない厨房の中の見学を外国で行ったので興味を持ってくれたようである。

その他、大学キャンパス内でスポーツの時間も取り入れた。せっかく外国に来たのももちろん観光も取り入れ、毎日忙しく予定が入り、学生からはゆっくりする時間がほしいという意見があった。しかし、どれをなくしたらいいかと聞くと英語授業時間を減らす希望になり、たくさんの経験をやめたいという意見は出なかった。体験学習が学生にとって意義あるものであったといえる。

4. 事前研修と参加学生の変化

本学では海外研修に出発する前の事前研修と海外研修を合わせた「海外生活事情」という科目を開講し、事前研修、海外研修、そしてその報告書を書いて学生は「海外生活事情」の単位を取得する。授業内容は以前報告²⁾した通り多岐にわたっている。渡航手続きだけでなく、外国で生活する心構えや具体的に必要なものなども教えている。何のために海外研修に参加するのか意義を明確にして、心配解消のための時間と考えるようにと指導している。学生たちも出発前からよく質問し準備をして行くため有意義で楽しい研修ができていると感じており、ほとんどの学生が「事前研修が役立った」と答えた。

「ホームステイでの話題づくり」という事前研修は、自己紹介だけでなく、自分の興味のあるものや日本のことについてホストファミリーと話ができるように準備するためのものである。海外研修の初期の時期は、以前報告したように¹⁾学生がホームステイでの生活を心配して、相当時間をかけてホストファミリーを喜ばせるものを準備していた。しかし、最近はなかなか出発前に十分な準備ができずにいるのが現状である。日本のことを聞かれても分からないことが多く、ホストファミリーとはその日にしたことを話すだけになっていることが多い。それでもホストファミリーと会話できたことは大きな喜びとして報告書に書かれている。当初「ホームステイの話題づくり」で意図してきたことがなかなか実行されなくなってきた。出発際に「海外

研修について期待や心配なこと」を聞くアンケート調査で、英語が心配であることについては以前報告した通り同じであるが、学生は最近になるとだんだん心配だと思ふ気持ちが薄れている。「大変心配」が「少し心配」に変わってきている。ホームステイについても研修を重ねるごとに「少し心配」から「あまり心配でない」に変わってきている³⁾。

事前研修で失敗談など多くのエピソードを話している結果、ホームステイはあまり心配ないと思うようになってきたのか、情報が多くなっているために誰でもやっていることだと思ひ、心配ないと思うようになってきているのかもしれない。あえて事前研修で学生たちを不安がらせることは考えていないが、先輩のことばとして「準備をしていけばいくほどより楽しめる」という言葉を学生たちに伝えている。気楽な気分で参加するのではなく、準備をして行けばそこから得られる楽しみや感動は大きくなることを認識させることを重要と考えている。また、学校の海外研修という理由で気楽に参加する学生がいることは否定できない。学校の研修は教員と一緒に出かけることによって自信がない学生に経験を積ませるものであるため、事前研修がとても重要である。しかし、どこまで「話題づくり」などの事前研修を行っていきけるかが課題である。経験を重ねた結果、教員の方が学生たちに期待をしすぎることも考えておかなければならない。

これも以前に報告したことであるが³⁾ ロサンゼルスで世話をしてくれていたスタッフの1人が急にアメリカ陸軍の予備兵の訓練が入ったため、数日留守をしたことがあった。帰ってきてから、学生が「予備兵って何？」と言って失礼なことを言っているのを耳にした。本学の学生は世界情勢に興味がなく、訪れた国の実情を全く知らないことを思い知らされた。事前研修の中で現地を知るために情報収集の時間をとっているが、それが十分に活かされていなかったといえる。海外研修は外国に行っているいろいろな経験をすることではあるが、何も知らないままではいけないと学生たちはいつ気がつくのかと心配する。知らないことが多いのは仕方がないことではあるが、教員としては学生たちにもっと興味のあるものや知っておくべきことを積極的に知ろうとする姿勢を持ってほしいと願う。今回はこの機会を逃さず帰国してからあの会話の意味を学生に説明できたが、自ら調べようという行動にはつながっていなかったのが分かった。目的意識を明確にもたせることが事前研修の意義ではあったが、自ら学ぶという姿勢も合わせて指導する必要性を痛切に感じた。

5. 長期海外研修への展望

早い時期の海外研修参加者の中にはこの海外研修がきっかけで個人留学まで発展させた学生がいた。短期大学卒業と同時に海外研修場所であったオーストラリアへ単身出かけたり、就職後お金をためて2-3年後にワーキングホリデーを利用して行き、そのまま勉強をしたり、働いたりする学生がいた。最近では短期大学部でのグループ海外研修を経験し、大学に編入して大学の提携している大学へ個人で6週間の研修に参加した学生がいる。短期の海外研修で外国に興味を持ち、そのモチベーションを個人で具体化した例がある。

大学では6カ月、6週間、3週間の個人研修が用意されているが、参加者は多くな

る傾向ではなく、今年度は短期大学部との合同のグループ研修に参加を希望している学生の方が多い。個人ではなかなか経験できない栄養士の講演や関連施設の見学などが目的ではあるが、実際には教員が付いていくので安心だと思っている学生がいる。英語を専攻にしていないという点からは、仕方のない点はあるが、学生時代にもっと積極的に何かを求める姿勢を期待したい。単純に短期の海外研修に参加し、それが長期の海外研修につながると考えたいが、経済的な理由もあり、何度も海外へ出かけることは難しい。大学ではTOEICの点数で奨学金を出す制度もあるが利用は少ない。本学では短期の海外研修を選ぶか、始めから長期の研修を選んで準備をするか、学生が分かれているようである。

6. おわりに

これまでの16回の短期海外研修に参加した学生は報告書やアンケート調査で参加してよかったと全員が答えている。さらに、ホームステイの異文化体験や専門分野に関連する体験研修が、英語研修よりも学生たちにとって良い経験であったと答えている。しかし、最近は短期の海外研修の参加希望者が減少している。社会の経済状態が悪く海外研修に参加できない学生がいることを考えると、このグループで企画している短期大学部の短期の海外研修を続けていけるかは難しくなる。参加する学生の中には連れて行ってもらえると、気楽に考えている学生もいる。

今後も海外研修に参加する意義を確認し、学生自らが積極的に行動して何が必要なのか準備する姿勢を養うことが海外研修とその事前研修では必要である。学生自らが学ぶ姿勢をととのえることが重要と考える。

引用文献

- 1) 松田康子, 滝川桂子, 短期大学における短期海外研修の意義とこれからの課題, 名古屋文理短期大学紀要第23号(1998)参照
- 2) 松田康子, 短期海外研修の意義とその事前研修について, 名古屋文理大学紀要第7号(2007)参照
- 3) 松田康子, 短期海外研修の成果と意義, 名古屋文理大学紀要第12号(2012)参照

参考文献

- 1) ロサンゼルス海外研修報告書 2011年3月, 名古屋文理大学短期大学部(2011)